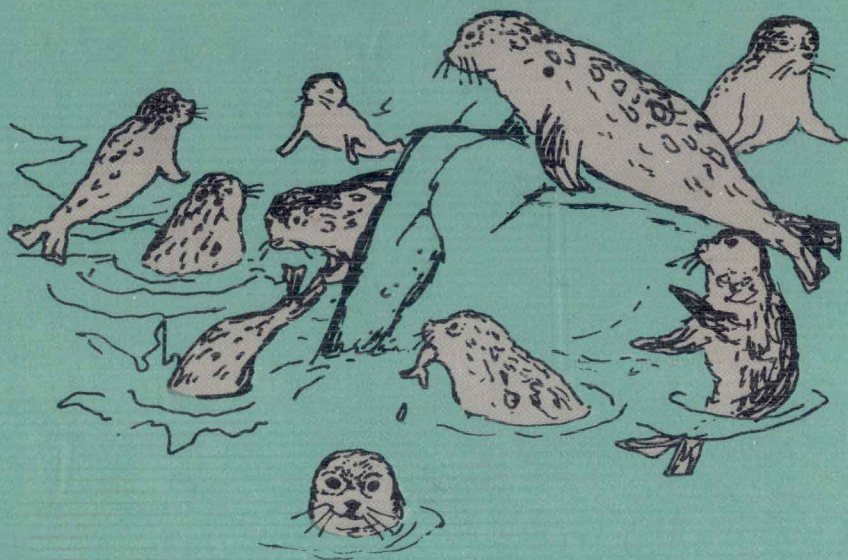


岡野薫子動物小説傑作選 1

銀色ラッコのなみだ

《北の海の物語》



銀色ラッコのなみだ

《北の海の物語》



NDC 913

岡野薫子動物小説傑作選・1

銀色ラッコのなみだ

おかのかおるこ
岡野薫子著

実業之日本社

1971年

208ページ

21.5cm

本文10ポ活字使用

小学校上級～中学生むき

銀色ラッコのなみだ

1964年2月28日 初版発行

1971年6月1日 新装初版発行

著者 岡野薫子

発行者 増田義彦

発行所 実業之日本社

104 東京都中央区銀座1-3-9

TEL(562)4311 振替東京326

印刷所 株式会社 東京研文社

© Kaoruko Okano 1971, Printed in Japan
8393-808011-3214

はじめに

ラッコは、むかし、北の海にすんでいました。

大きさは、オットセイの半分くらい。その顔は、どこか子ネコに似にている、愛らしい動物です。波の上に
あおむけにうかびながら、両手で貝などを食べている
すがたは、平和そのもののようです。

しかし、ラッコは、そのすばらしい毛皮のために、
人びとから、いつもねらわれてきました。

さて、エスキモーの少年は、八歳になると、おとな
と同じように獺りようにでかけます。さまざまな経験けいけんをつん
で、少年は、やがて、獺りようのほんとうの意味を知ること
になるのです。

氷のうかぶ北の海で、少年とともに流したラッコの
なみだは、なんだったでしょうか――。

これは、一八〇〇年代のころの物語です。

もくじ

第一部	流水の季節……………	7
第二部	めぐりあい……………	59
第三部	ラッコを追って……………	117
第四部	エスキモーの冬の夜話……………	187



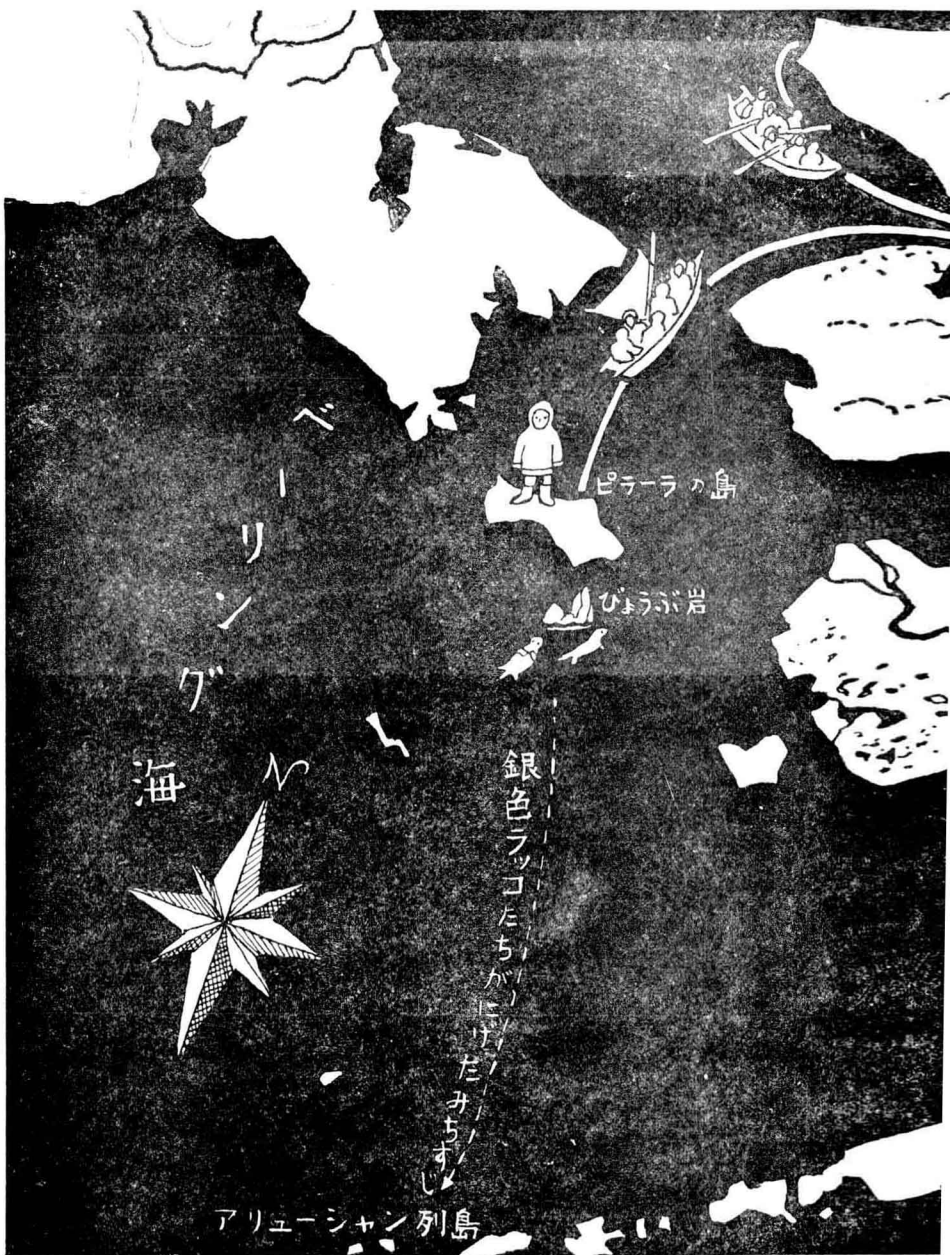




アラスカ

アラスカ

太平洋

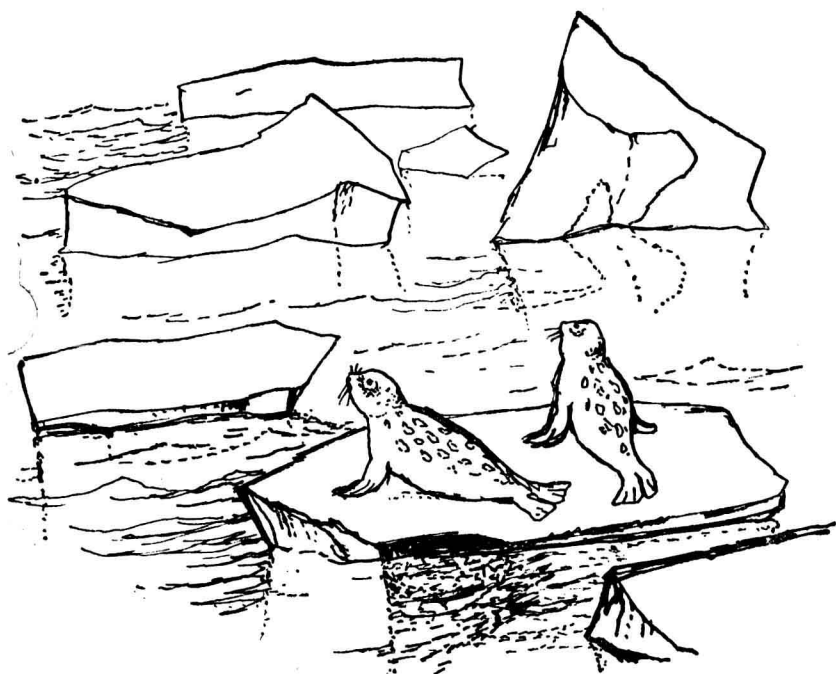


■この本の絵を書いた人■

寺島竜一

一九一八年生。東京都出身。
東京美術学校卒業。一九五七
年「N氏像」により日展特選
ほかに、光風会会員賞受賞。
現在光風会評議員、日展委嘱。

第1部 流水の季節



- 1 ピラーラのたんじょう日
- 2 獺の勉強 17
- 3 北の海のラッコたち 25
- 4 クジラ祭 38
- 5 変てこなやつ 42
- 6 流水の季節 47

1 ピラーラのたんじょう日

遠い北の海——、そこでは、夏と冬の季節が、かわるがわるやってきます。

冷えきった海に、ある日、とつぜん、数しれぬ氷の針^{はり}がちらばると、針^{はり}はたがいやすいよせられ、キシキシ音をたてながら、海に氷がはりつめます。うすみどり色にすきとおる、美しい氷の海です。アザラシたちは、こおった氷の上にとりのこされ、まごまごしながら、にげ道をさがします。

空からふってくる雪は、するどい氷のかけらになって、たちまちこおりつきました。灰色^{はいろ}にとざされた冬の季節は、八か月ものあいだ、つづくのです。

やがて、ながい冬がおわるころ、あたたかい風に氷はとけて、ところどころに水たまりをつくり、また、小さな川になって流れはじめます。小さな川は、ちよろちよろ走り、氷のわれめやあなをみつめて、すばしこく下の海へ——こおっていない水の中へ、



すずしい音をたてて流れおちます。

海鳥の群れが、つばさをはばたいてやってきます。たくさんの浮氷は、たがいにぶつかりあいながら、潮の流れにのって動きはじめます。アザラシや、また、ゾウほどもありそうなセイウチをのせて、浮氷は流れさっていくのです。こうして、みじかい夏の季節がはじまるのでした。

このきびしい自然にあけくれる北の海の小さな島に、エスキモーたちが住んでいました。

島の海岸には、流木を組んでつくったものほし場があちこちに現られ、キャック（ひとり乗りの小さな皮船）やアザラシの皮が、いくつもほしてあります。島は、どこへいっても、アザラシのにおいがしていました。

ツンドラの草原を流れる川の近くに、四、五戸ずつの小さな部落が、ぼつんぼつんとちらばっています。

どの家も、クジラの背骨の骨組みに、ツンドラのしば土をきりとりかぶせただけの、たいそうそまつなつくりです。へやのて



んじょうとかべに、あかりとりのまどがきりぬかれ、まどガラスには、すきとおるアザラシの腸ちようがはってありました。

冬もおわりに近い、ある夜――、パニアックの家のまどに、アザラシの燈火とうかが、いつもよりずっと明るくがやいていました。

家の中では、毛皮をしきのべたへやに、おとうさんのパニアックが、家族といっしょにすわっていました。いつものより大きな石ランプが、みなのもん中におかれ、アザラシの油があたたくもえて、四人の顔をてらしだしています。

きょうは、上の男の子ピラーラの、八さいのたんじょう日でした。

おかあさんのマキアーニは、三つになったばかりの妹のマキーネをひざからおろすと、アザラシの皮ぶくろから、とっておきのごちそうをとりだしました。コケモとアザラシのバターがとけあった、すっぱいおいしいたべものです。子どもたちがむちゅうになってたべるのを、両親は幸福そうに見守りみまもながら、たがいに目を見かわしました。

ピラーラはごちそうをたべてしまうと、口のはたをなめ、黒いひとみをくるくるさせて、ちよつとはずかしそうにわらいました。

おとうさんは立っていくと、へやのすみから、小さなもりをとってきました。

「さあ、ピラーラ、おまえのもりだ」

「ぼくのもり——」

「そうだよ。おとうさんがこの冬のあいだにつくっておいた。小さいけれど、りっぱな離頭もりだ。ごらん、もりの頭が、柄からはなれるようになってる」

そういつて、おとうさんは、もりがしらのついたつけ柄を、ながい柄からはずしてみせました。もりがしらのねもとには、小さなまるいあながあけられ、じょうぶな皮ひもで、ながい柄にしっかりむすばれていました。

「一度とらえたえものを、にがさないようにするには、こういうしかけがあるんだよ」
もりがしらを、もとのように柄にはめると、子どもの手にそれをわたしました。

「いいか、ピラーラ。おまえは、きょうから八つになったんだ。エスキモーのあいだじゃ、獵師の勉強をはじめめるのに、ちょうどいい年ごろなんだよ」

ピラーラは、もう、むねがわくわくして、口もきけないほどでした。自分の背たけほどもあるもりをもつて立つと、いっぺんにおとなになったような気がしました。

（サネックに見せてやりたいナ。このすごいやつを見せたら、びっくりするだろうナ）

マキーネは、目をみはって、いつもとすっかり変わって見えるおにちゃんを、見上げていました。

「おかあさんからも、あげるものがあるよ。ピラーラ」

おかあさんは、うわぎのむなもとに手をいれると、アザラシの皮でつくった小さなふくろをとりだしました。

「この中には、アザラシのほし肉が、いくつもはいつているの。おまえが生まれてから七日のあいだ、おかあさんは、たべものの最初のひとときを、いつも、このふくろに置いてしまっておいたのだよ」

ピラーは、ふしぎそうに皮のふくろをうけとりました。おかあさんのはだのあたたかみが、手につたりました。

「つぎの冬がきて、入江に氷がはりつめたら、そのときに、そのほし肉でアザラシをさそうのだ」

と、そばから、おとうさんがいいました。

「ああ、息^{いき}穴^{あな}狸^{たりよう}のことなんだ。ね、おとうさん、そうなんでしょう」

おとうさんは、わらってうなずきました。

アザラシは、冬のあいだ、氷の上にでたり、氷の下の海にもぐったりしてくらしています。

（氷の上でアザラシが休んでいるとき、いつだったか、ぼくがそうと近づいていたら、あっとおもうまに、すがたをけしてしまっただけ。休み場のすぐそばに、まるいあながあいていて、そこからトボンと、下の海にもぐってしまった。アザラシの空気あなだよ——って、あのとき、おとうさんは教えてくれた。そして、冬の夜、空気あなをさがして歩きながらアザラシをとるのが、どんなに危険^{きけん}な狸^{りよう}か、話してくれただけ……）

その危険な^{きけんりよう}猫に、つぎの冬にはつれていってもらえるのです。ピラーは、もりの先をあかりにてらして、じっとみつめました。そのようすがパニアックにそっくりなので、おかあさんは、おもわず、にっこりしました。

「おとうさん、もりに、もようがほってあるね。 マルとヒトの形をしてる……、これはなんのしるし？」
「ああ、それはね、マルは天の月。それから、その下にほってあるのは、ただのヒトじゃあない。海の母のしるしだよ」

パニアックは、ちょっとことばをきりました。石ざらの上でジリジリもえる^{とうか}燈火をみつめるパニアックの顔には、ふしぎな^{ひょうじよう}表情がうかんでいました。

「月の中には、ひとりの男が住んでいる。その男は、とても強い力をもっていて、海の水を自由自在^{じゆうじざい}にひきよせることができるのだ」
パニアックはつづけました。

「そして、海の底^{そこ}には、ひとりの女が住んでいる。その女は海の母とよばれ、千年も二千年ものむかしから、海のけものたちをしたがえてきたのだ。」



おれたちは、どんなことがあっても、このふたりをおこらせてはいけない。おこらせるようなことさえしなければ、このふたりは、おれたちエスキモーを、いつもまもっていてくれるのだよ」

「おとうさん、海の母って、にんげんなの？ はじめから、海の中で生まれたの？」

「海の母はね、ずっとずっとむかし、北の海のある島で生まれたのだよ。みたところは、ふつうの子とおなじだった。ただ、すこしばかり風変わりな子だね。ほかのおなじ年ごろの女の子のように、にんぎょうあそびをするでもなく、また、おかあさんが、さいほうとか、毛皮のしまつのしかたとかを教えようとしても、ぼんやりしていて、手もつかないありさまだった。

女の子は、たったひとり、海べにたたずんで、じっと海をながめているのが好きだった。

その当時、島の海岸に住むエスキモーたちは、海で魚や貝をとるほかは、くらしに必要なものをなんでも、数すくない陸のけものにたよっていたのだ。夏はアオギツネをわなでとり、川をよこぎるカリブー（トナカイの一種）を、ヤリでしとめたりした。それも、ごく、うんのいいときにかぎられていたのだよ。生活はとてもくるしくて、飢え死にするものが、まい年のようにあったということだ。

そんなとき、年よりや、からだのよわいものから、さきに死んでいったのだ。それでも、女や子どもは、おちくぼんだ目をギョロつかせながら、獵をしなければならぬ男たちに、たべものをゆずった。

ところで、その女の子だが……、ある年、ききんがようやくおわったというのに、どうしてか、もう、たべものをとろうとしなかった。いつも青ざめた顔をして、めったに口もきかなくなった。ある日、とつ